

今日のみ言葉 234 「神は愛である」 2014.1.8

神は愛である。

愛の内にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくくださる。

(Iヨハネ4の16より)

God is love, and those who abide in love abide in God, and God abides in them.

神はどういうお方であるか、それについては古い時代から神話のような形で伝えられている。(*)

(*) ギリシャやローマ、中国、あるいはインドや日本においても古代文書においてさまざまな神々が現れる。ギリシャやローマの神話で現れる神々は、怒りやねたみ、闘争心、異性間の人間的な感情などがそのままに現れており、日本の古事記、日本書紀、風土記などに現れる神々の姿も全く人間そのもので、乱暴狼藉をはたらく神や、敵意や欺き、殺害などもする神々も記されている。中国でも古代では、神々が現れるが、そのうちの神農は人の体で首から上は牛という姿の神とされ、農耕や医薬などの発明者とされる。その後は、人間の5人の皇帝(5帝)が神のように敬われ神と人間の区別が定かでない。

この世に存在するさまざまな力の接して、人間を超えた存在として、神のようなものを感じて恐れるのは、世界にみられるが、そうした混沌とした神への観念が、確固としたものにしたが、キリストであった。旧約聖書に示された神は、とくに詩篇や預言書において深い愛と真実な神の姿を表しているが、他方、旧約の前半の文書では、他民族への攻撃を命じたり、一部には神の愛がわかりにくい部分もある。そうした中で、神の本質を、比類のないかたちで明瞭に示しつつ、実際にこの世界に現れ、生きられたのがキリストであった。キリストは神と同じであると聖書は記しているが、それは愛という最も重要な面においてこそ神の本質をそのまま表している。神は愛なり、というとき、私たちはキリストを見てその愛を実際に思い起こすことができる。

神は万能であり、この宇宙、世界を創造された。そしていまも支えている。神は愛ならば、その万物の創造も愛をもってなされ、その愛をもって現在も支えておられ、未来もまたその愛をもって導かれることを信じることができる。

この世は矛盾や悪、汚れで満ちている—これは一般的な実感であろう。しかし、もし神は愛なり、ということを実際に信じ、受け入れるならば、その神の愛によって創造され導かれているこの世界には、その神の愛で満ちているということになる。そんなことは到底信じられないという人々が多いが、これは信じることによって開かれていくことである。真実な唯一の神などいないと信じるなら本当にそうした神はその人にとって存在しないままになる。しかし、そのような神はおられると、信じて物事をみるとときには、次第に神の働きがみえてくる。同様に、さまざまな苦しいことや神の愛など感じられない状況にあってもなお神は愛なのだ、と信じ続けていくときには、たしかに神はその愛を示してくくださるようになる。そしてその神からうけた愛をもって他者の運命がよくなるようにとの祈りをもってするようにと導かれる。

それが、神の愛の内にとどまろうとすることであり、それによって私たちは愛の神の内にとどまり、また神も私たちの内にとどまってくくださるという。この弱くて汚れたようなもののなかに、万物を創造した絶大な神が来て住んでくくださる！ それは頭で考えても到底分からない。このことも、私たちの魂の深いところで実感するようにと神に導かれて初めてわかることである。

私たちの内に、自分中心の考え、あるいは他人の思いや批判等々でなく、愛と真実に満ちた神が住んでくくださる—それ以上の幸いはない。それさえあれば、私たちは死に面しても希望を失わず、死を超えた命を実感できるであろう。神は永遠であるから。



この高山に咲くチングルマは、中部地方から北の北海道やさらに、サハリン、カムチャッカ、アリュウシヤン列島など寒い北方にかけて咲くという厳しい寒さに耐えて咲くものです。関西から南部では見ることができないのですが、中部以北では高山に咲く花のうちでもとくによく知られているものの一つです。名前は、花の終わったあとの実



を付けた姿（左下の写真）が、子どもの遊ぶ風車（カザグルマ）に似ているために、稚児車→チングルマ となったといわれています。

この秋田駒ヶ岳は、活火山で、この写真の近くでは、1970年に噴火が生じています。この写真でも赤茶色の火山特有の土が写っていますがそこに残雪が少し見えます。

高さは10センチほど、白い花をたくさんつけ、群生し、大群落をつくることもあります。火山の溶岩が風化してできた荒々しい地であっても、このように可憐な花を咲かせる神のみわざに驚かされます。 荒れ野に花を咲かせる神（旧約聖書 イザヤ書35）を思い起こさせるものがあります。

私たちの感覚では草花といえば、春の温かい季節を思い出すことが多いのですが、半年以上も雪が溶けないとか氷点下数十度にもなるような厳しい環境にある北国の高山やアリュウシヤンなどでも咲くという強い生命力が、この小さな花々の中に宿っているのです。

これは人間にも言えることで、弱々しい病気がちな人、あるいはずっと寝たきりのような方々が、信仰を固く持つことによって、元気な人以上に強い精神力を持っていることもあります。神は、からだにある病気を持って苦しんでいた使徒パウロに次のように語りかけました。

「…（神の）力は弱さの中でこそ、十分に発揮されるのだ。」

そしてこの言葉を受けて使徒は、弱さや困難、迫害のなかにあっても満足していると言い、「わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである。」と述べています。

（新約聖書コリント信徒への第二の手紙12の9-10）

神は、弱そうに見えるところに驚くべき力を与えることができる存在だからです。

（写真・文ともT. YOSHIMURA）